

楽曲紹介

解説=野本由紀夫

4/16 | 4/18 | 4/21

4/16

4/18

4/21

新時代の幕開けに向けて

指揮者のバットイストーニが東京フィルの4月定期で「戴冠式」関連の作品を選曲したのは、新天皇のご即位を祝ってのことだという。もちろん日本の皇位継承と西洋の「戴冠式」は、似ているところもあるが、違うところも多い。

ご存じのとおり、天皇即位は三種の神器(剣・勾玉・鏡)を受け継ぐ。皇位継承の儀式は「剣璽等承継の儀」と呼ばれ、三種の神器のうち剣と勾玉(璽)のほか、2つの印鑑(御璽と国璽)を継承する(5月1日)。それに対し、ヨーロッパでも、王位継承は3大レガリア(王権の象徴)、すなわち王冠と宝珠と王笏を受け継ぐ「戴冠式」により執り行われる。

そもそも、日本の「天皇」は、最古にして世界で現存する唯一のエンペラーだといわれる。しかし、世界史ではエンペラーは「ローマ帝国のカエサルの後継者」のことであり、中国の「皇帝」と並ぶ高い地位であり、他国や他の民族の統治者のことである。したがって、一国の支配者であるキングよりも格が上となる。ところが、皇帝は天皇家と違い、養子縁組や選挙で決まる場合もある(神聖ローマ帝国やナポレオン皇帝など)。

それに対し、キングは世襲で「血統」を重んじるが、王朝が打ち倒されていくこともある(フランス革命の際のブルボン王家など)。その意味では、(諸説あるとはいえ)万世一系で短く見積もっても1400年以上続いている天皇制は、ヨーロッパのEmperorでもKingでもなく、世界で唯一無二のTennōという特別なシステムなのだろう。

したがって、今回の選曲は、あくまでもヨーロッパ人なりの即位の礼への祝意の表し方ではある。とはいえ、災害が多かった平成が終わりを告げるとともに、新時代が安寧な時代となることを、世界のだれもが心から祈っていることだろう。

ウォルトン(1902-1983)

戴冠式行進曲『王冠』

ウィリアム・ウォルトンは、ベンジャミン・ブリテン(1913-1976)と並ぶ、20世紀イギリスを代表する大作曲家である。とりわけ、オラトリオ『ベルシャザールの饗宴』(1931)や2曲の交響曲、シェークスピアを題材とした映画音楽が有名だ。

20世紀の作曲家ではあるが、明快な調性音楽を好んだため、端正なネオ・ロマン主義で作品は非常に聴きやすく、親しみやすい。その点が、イギリスでも人気の理由だろう。

戴冠式行進曲『王冠』(1937)は、曲名からも想像が付くとおり、もともとはエドワード8世の戴冠式のための祝典音楽だった。ところが、エドワード8世は、1937年の戴冠式を待たず、わずか325日で退位。いわゆる「王冠を賭けた恋」、アメリカ人の人妻(しかも離婚歴あり)への愛を貫くために、王位を捨てたのであった。

時代はちょうど、ヒトラー(1889-1945)のナチス党がドイツで政権をとって(1933)、国際情勢にきな臭さが漂い出したころだから、イギリスの王位継承は国内外で大問題だった。

結局、王位はエドワード8世の弟、ジョージ6世が引き継ぐこととなり、1937年5月12日に執り行われた戴冠式で、ウォルトンの戴冠式行進曲『王冠』は演奏された。なお、現エリザベス女王2世の戴冠式(1953)やチャールズ皇太子とダイアナの結婚式(1981)、およびウィリアム王子とキャサリンの結婚式(2011)でも、『王冠』は演奏されている。なお本日は、作曲家自身のカット版で演奏される。

ちなみに、国王冠に施されている宝石は、ダイヤモンド2,868個、真珠273個、サファイア17個、エメラルド11個、ルビー5個である。王冠正面のダイヤモンドは、史上最大の原石を分けたうちの最大のものだそうである(次に大きい石が王笏に使われている)。

【作曲年代】1937年 【初演】1937年5月12日、イギリス国王ジョージ6世の戴冠式において。

【楽器編成】フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、テナードラム、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール、チューブラーベル)、ハーブ、オルガン、弦楽5部

4/16

4/18

4/21

モーツァルト(1756-1791)

ピアノ協奏曲第26番 二長調 K.537『戴冠式』

ピアノ協奏曲第26番K.537は、モーツァルトが経済的に困窮していた1788年2月、しばらく作曲していなかったピアノ協奏曲により、起死回生の大逆転をねらって書かれたと考えられる曲である。

彼がウィーンでもてはやされたのは、1786年ごろまで。それ以後、最晩年の5年間は彼に対する熱狂もウィーンでは冷めてしまい、ピアノ協奏曲の量産もストップ。代わって、『フィガロの結婚』(1786)や『ドン・ジョヴァンニ』(1787)など、オペラ創作に力を入れ始めていた。

苦しい生活のため、かつての栄光を夢見てこのK.537を2月に作曲する。さらには同年夏にわずか6週間で最後の三大交響曲(第39、40、41番『ジュピター』)も作曲した。それでも演奏会が開かれる目は立たず、経済状況はどんどん厳しくなっていた。

この協奏曲が初演されたのは、作曲から1年以上たった、ウィーンからベルリンへ北上する途中に立ち寄ったドレスデン宮廷においてと考えられている(1789年4月14日)。「戴冠式」と呼ばれるようになったのは、さらに翌年の1790年10月15日、オーストリア皇帝であるレオポルト2世が神聖ローマ帝国皇帝に就任する、戴冠式を祝う演奏会で演奏されたからである。

この祝賀演奏会さえも、モーツァルトは戴冠式の随員には選ばれず、自腹でフランクフルトまで赴いた。しかも演奏会の客入りは悪かったというから、屈辱的であつたらう。

二長調かつトランペット+ティンパニという編成は、伝統的に「祝祭」の音楽である。豪華さと華やかさを備えているため、今日では人気ピアノ協奏曲のひとつとなっている。意外なことに、本日のソリスト、小山実稚恵がこの曲を弾くのは、今回が初めてだという。とても演奏が楽しみである。

第1楽章 しばらくオケが演奏した後と同じ主題旋律を独奏楽器が演奏する、協奏的ソナタ形式の楽章。モーツァルト自身は、楽章最後のカデンツァ(独奏者が単独で演奏する部分)を作曲していないので、小山がどのように演奏するか、聴きどころのひとつである。

4/16

4/18

4/21

第2楽章 緩徐楽章。モーツァルト自身は、左手の音符をひとつも書き入れていない。初演は本人が独奏したので必要なかったのかもしれないが、彼の没後にこの曲を出版するにあたって、出版者のヨーハナ・アントン・アンドレが左手部分を補作した。今日では、これを踏襲して演奏する。

第3楽章 アレグレット(やや快速に)の終楽章。やはり自筆譜では完成していない部分がある。同じメロディが楽曲中に何回も登場する、ロンド形式で書かれているので、覚えやすく親しみやすいだろう。

【作曲年代】1788年2月24日、ウィーンで完成。**【初演】**1789年4月14日に、ドレスデン宮廷において、モーツァルトのピアノ独奏による。

【楽器編成】フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

チャイコフスキー(1840-1893)

交響曲第4番 へ短調 Op.36

チャイコフスキー(1840-1893)が人生最大の精神的危機を迎えた1877年、37歳のときの作品である。この年の7月に、彼は結婚した。相手は、モスクワ音楽院で教え子だったアントニーナ・イヴァーノヴァ・ミリューコヴァ(1849-1917)である。

しかし、これは奇妙な結婚だった。結婚してわずか20日で、彼は逃げるようにしてひとり夏のリゾートを過ごした。9月にはモスクワ川で入水自殺さえ試みている。挙句の果ては、仕事依頼のニセ電報を打ってもらって、スイスやイタリアへ逃避行してしまう始末。

今日、チャイコフスキーが同性愛者だったことは、ほとんど定説化している。彼がこの結婚を苦痛に思っていたことは間違いない(しかし離婚はしなかった)。

この時期に書き進めたのが、交響曲第4番である。前年の12月から、チャイコフスキーは、ロシアの鉄道会社の社長未亡人だった、ナデーダ・フォン・メック夫人から巨額の年金を受け取るようになった。いわゆるパトロンである。これで経済的な心配をせずに作曲に専念できるようになったのだが、これまた奇妙な人間関係であった。ふたりは文通のみで交流し、年金が突然打ち切られた13年後まで、ついに顔を合わせることはなかった。

筆まめだったチャイコフスキーは、フォン・メック夫人にあてて、全部で760通もの手紙を書いているが、交響曲第4番についても手紙のなかで詳しく説明している。以下、その手紙を引用しながら解説しよう。なお、この作品は「わが良き友」フォン・メック夫人に捧げられた。

第1楽章 序奏付きのソナタ形式の楽章。チャイコフスキーの手紙の説明によると、冒頭のファンファーレは「運命」である。「それは目的を実現しようとする幸福の希望を妨げる冷酷な力であり、しあわせが満ち溢れたり、気持ちが晴れ渡ったりしないように、嫉妬深く見張っている力であり、ダモクレスの剣〔筆者註：古代ギリシャ神話の逸話のひとつ〕のように頭の上にはいつもしかかかって、魂を苦しめる力なのである。この運命の力はけっして克服できないもので、私たちはこれと妥協し、嘆き悲しむしかない」。

絶望感が極まったところで、クラリネットにメランコリックな副主題が現れる（ため息風の、下行音階をとまなう。「現実から逃避し、幻想に浸ったほうが賢明なのか」。やはり幻想であったかのように、ふたたび「運命」のファンファーレが鳴り響く。「こうして、人生は幸福のはかない夢や幻想と、重苦しい現実とが果てしなく入れ替わる。この海をさまよって行け。この海原がおまえを捕まえて、海深く沈めるまで」。

第2楽章 アンダンテの緩徐楽章。オーボエのスラヴ的なメロディではじまるこの楽章は、「哀愁のもうひとつの姿」であり、「過去を悔やみながら新しい生活をはじめめる気は起らない。過去に浸っていることは悲しくもあり、しかし甘いものでもある」と、メランコリーに満ちた心境が描かれる。

第3楽章 スケルツォ楽章。「とくに決まった感情を表出した楽章ではなく、奇想曲風のとりとめもない形象である」。弦楽器群は、一貫してピツツイカートで演奏される（弓を完全に置いてしまうはず）。

中間部は、木管楽器群によるロシア民謡風の音楽と、金管楽器群による「どこか遠くを通る軍隊の行進」である。

最後は、3つの音楽が断片的に登場して消えていく。

第4楽章 凱旋的なソナタ形式の楽章。トゥッティ(全員の強奏)のあと木管楽器に出てくる「ミミミレードド | シーラ」という主題は、民謡『野に立つ白樺』である。「あなた自身のなかにどんな喜びも見いだせないなら、進んで人々のなかに入っ

て行きなさい。彼らの喜びに浸りながら、自分も喜びなさい」。

最後にもう一度「運命」のファンファーレで流れが中断されるが、その後はもはやメランコリーが支配することはなく、行進曲風の音楽はますます過熱して、熱狂のなかで凱旋的な幕切れとなる。

【作曲年代】1877～1878年 【初演】1878年2月22日(旧暦10日)に、ニコライ・ルビンシテインの指揮により、サンクトペテルブルクで行われた。

【楽器編成】フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(太太鼓、シンバル、トライアングル)、弦楽5部

4/
16

4/
18

4/
21

のもと・ゆきお(音楽学)／桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部教授(音楽史、鑑賞理論、指揮法)。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」「ららら♪クラシック」の監修・解説者、Eテレ学校番組「おんがくブラボー」番組委員。NHK-FMラジオ「オペラ・ファンタスティカ」レギュラー解説員。昨年末、1000人の第九をパシフィコ横浜で2回指揮。